

一八二〇年代の「個人主義」論とスタンダール

柏 木 治

はじめに

スタンダールにあつて「個人」と「自由」の問題は、一八世紀末から一九世紀前半に生きた多くの知識人同様、きわめて重要な位置を占めている。とはいへ、王政復古期から七月王政にかけての「自由」や「個人」についての議論はかなり錯綜していて、その実相はなかなか捉えづらい。これらの概念をみずからの思想的立場と結びつける議論のありかた、それが生じてくるのがまさにこの時代であり、その結果として、思想的構え、あるいは政治的立場としての「個人主義」や「自由主義」といった言葉がつつぎに誕生してくるのもこの時期であつて、それだけに錯綜の度合いも激しいからである。

たとえば「自由主義」という語が最初に登場したのは、*Trésor de la langue française* によればまさに王政復古になつて三年後、一八一八年のことで、メーヌ・ド・ピラン (Maine de Biran 一七六六―一八二四) のテキストにおいてとされている¹⁾。工藤庸子がバルザックの『老嬢』(*La Vieille Fille*) の一節を引きながら解説しているように、「自由主義的な意見」(*opinions libérales*) はスタール夫人 (Anne-Louise Germaine Necker, baronne de Staël-Holstein

一七六六―一八一七)とバンジャマン・コンスタン (Benjamin Constant de Rebecque 一七六七―一八三〇) によって広められた、というのが当時の一般的な受けとめかたであった。²⁾ もちろんスタール夫人は一八一七年に没しているから、実際に *liberalisme* という語を使ったわけではないが、ナポレオン体制の崩壊後でもないこの時期、かれらと同時代の進歩派にとって「自由主義」はひとつの思想としてその名を付与され、この言葉によって政治的立場を表明しうるような状況にいたっていたことがわかる。

同様に、「個人主義」という語についてもやはり同時代の具体的な歴史的文脈のなかからあらわれてきたと考えられる。というのも、この語は、一八二〇年代半ば、自由主義的経済論とサン＝シモン派の産業主義的主張とのあいだに誕生した、といってよいからである。のちに立ち入って論じるように、*individualisme* という語は一般に、サン＝シモン派の機関紙となる『生産者』(*Le Producteur*) に掲載された³⁾ピエール＝イジドル・ルーアン (Pierre-Isidore Rouen) によるシヤルル・デュノワイエ (Barthelemy-Charles- Pierre-Joseph Dunoyer de Segonzac 一七八六―一八六二) に対する批判のなかで最初に使用されたとされている。アダム＝スミスの著作が大陸に紹介され、フランスでもジャン＝バティスト・セー (Jean-Baptiste Say 一七六七―一八三二) を介して自由主義的経済論が伸長し、その考えは銀行家を中心とするいわゆる「産業者たち」(*industriels*) の思想的基盤となっていた。こうして、さきに触れた自由主義も、政治的文脈のみならず、むしろそれ以上に経済的文脈の中で議論されるようになっていくのだが、そこでは当然のことながら個人の経済的自由と組織(その最大のものが国家である)による統制との関係が主題化されるであろう。ルーアンのデュノワイエ批判もまさにそのような文脈のなかで生じたものであり、一八二五年前後、スタンダールもまた、『生産者』とその周辺の議論に触発されるかたちでそこに介入し、自由と個人と経済活動の問題に明確な意思表示をしたのであった。

ちなみに「産業主義」(industrialisme)という語彙の初出は一八二四年、「社会主義」(socialisme)は一八三〇年代初期で、「自由主義」「個人主義」とあわせて、ほぼ一八二〇年代をさむ十数年のあいだにあらわれていることも注意しておきたい。⁴⁾

筆者はすでに、『産業者に対する新たな陰謀について』等の検討をとおしてスタンダールの思想的立場を自由主義と規定しつつ、同時代としてはきわめて個人主義的な立ち位置からこの自由主義に与していたと論じたが⁵⁾、かならずしも個人主義の議論に特化してこの問題の輪郭を明瞭に示すにいたらなかった。本稿の主たるねらいはこの点を補足的に論じることであるが、自由主義と個人主義をめぐる問題は射程が広く、短い論攷で安易に処理することはできない。したがって、ここでは一八二五年前後における自由主義とスタンダールの個人主義的志向との関係にしぼって検討したい。

「個人主義」(individualisme) と ン 語

フランス語辞書でも individualisme という語の文献上の初出については、すでに触れた P・I・ルーアンの記事を挙げるのが普通である。ただし、*Tre sor de la langue fran aise* は、セレストアン・ブーグレとエリー・アレヴィイが序文を付して刊行した『サン＝シモンの学説・解義 第一年度』(*Doctrine de Saint-Simon, Exposition, Premi re ann e*) の新版にある註を根拠に、この語の初出を一八二五年の『生産者』としているが⁶⁾、当のルーアンの記事は翌年一八二六年一月に発行された第一七号に掲載されたものであり、この点は訂正されなければならない。いずれにせよ、individualisme という語も、とくに一九世紀前半、政治、経済、哲学上のさまざまな抽象語をつくるのに目立つようになった接尾辞 †-isme † を用いて造語されたもののひとつであり、とくに興味深いのは、他の多くの語彙とち

がって、この語に關してはおそらくフランス語が最初であろうという点だ。語の起源と受容を丹念に追ったマリ＝フランス・ピゲによれば、英語の individualism の初出は一八二七年であり、ドイツ語においても individualismus が確認できるようになるのは一八三二年のことだとい⁽⁷⁾う。

以上のように、individualisme という語が最初に用いられたのはフランス語においてであろうことはおそらくまちがいないが、前出の M-F・ピゲの調査が示唆しているように、時期についてはさらなる検討を要する。たとえば、口頭ではジョゼフ・ド・メーストルが一八二〇年にすでに使っていたとおぼしき記述があり、また、一八二〇年代のはじめ、散り散りになった秘密結社カルボナリー党員の一部が新たな組織を結成し、「個人主義者協会」(Société d'Individualistes) という名前を使っていたことが確認できる⁽⁸⁾。もともと、ド・メーストルの場合は、半世紀以上もあとの証言であり、その実証性に不確さは拭えない。

いずれにしても、一八二〇年前後の individualisme という語の出現は、きわめて政治的な文脈のなかで生じたものである点は確認できる。まずド・メーストルの使用は、実際にこの語を用いたかどうかの事実的確認は措くとしても、少なくともそれが用いられたと報告されている Ch・ド・ラヴォー (Lavau) との会話においては、この語が比喩的にプロテスタンティズムと結びつけられ、批判の対象になっている。ド・メーストルが力説していたのは、フランス革命が社会全体の合意形成の条件を破壊したこと、つまり革命の成功は「あの精神の深く恐ろしい分断、あらゆる学説の無制限なまでの分割、このうえなく絶対的な個人主義 (individualisme) にまで突き進んだ政治的プロテスタンティズム」のなかにあるということであつた⁽⁹⁾。ド・メーストルの革命批判は、各自がみずからの主^{あるじ}となり、国民的世論の統一の合意というものを消失せしめてしまったことにある。革命によって浸透したこのような個人主義的な心性は、真の民主主義的価値観のもとに醸成される新たな世論をつくりだすどころか、無数の対立しあう主張のなかに世論を

溶解せしめることにしかならない、というのである⁽¹⁰⁾。かれにあつては、個人主義こそが社会を分断し、社会的共同体の精神を崩壊させる要因として批判の対象になるのだ。

一方、カルボナリー党の場合は、フランス軍のスペイン介入後に解散したあと、何人かの元党員が集まり、もはや直接的な革命を目的とするのではなく、むしろ哲学的な集団の形成を目指した。さきに述べたとおり、一八二三年、この集団があらたに「個人主義協会」(société d'Individualistes)と名乗るようになったわけだが、この名称は、人間を個々に捉え、その能力や欲求をもとに市民権や参政権を考えるという点⁽¹¹⁾が強調された結果である。ここには、社会の法や政府の恣意的な活動に根本から対抗しようという意味があつた⁽¹²⁾。要するに、個人の自由を何よりも優先する意思がこの名称に込められていたのである。ここでの individualiste はこの協会の会員を指すいわば固有名詞であつたが、この時期にこの語が使用されたのはまさしく「個人主義」が思想として切り出されてきたという歴史的背景を匂わせる。

また、カトリックの立場からの使用も確認できるが(一八二五年)、ここでは individualisme を利己主義(egoïsme)の一段進んだものとし、「愛情ばかりか、思想、慣習、信仰までももっぱら自分という人間ひとりに結びつける⁽¹⁴⁾」としてこれを批判している。

以上のように、一八二〇年ごろから使用されはじめた individualisme という語は、きわめて閉鎖的なカルボナリーの例を除いて、基本的に批判の対象となる政治的・思想的態度であることがわかる。その際、これを使用するのは伝統的な体制を維持しようとする保守派であり、ド・メーストールであれば正統王朝を正統とみなす社会の全体的同意といったものが不可能となったことの結果としてあらわれたのが「個人主義」であり、カトリック教会も利己主義の延長としてこれに批判の矛先を向けたのであつた。

ところで、このような時代の文脈の中でもっとも興味深いのは、これが個人の「自由」との関係でどのように位置づけられたかという問題である。前述のとおり、一般にこの語の確たる初出として挙げられているのは『生産者』の記事のなかでの使用であり、それはサン＝シモン主義の立場から同時代のシャルル・デュノワイエの主張を批判することを目的とした、否定的な文脈で出されてきたものであった。王政復古期の一八二〇年代において「個人主義」は、王政を支える国民的な合意やカトリシズムによる精神的紐帯を模索する保守派側からはそれを阻害する深刻な要因として受けとめられていたのである。そしてまた、そこにスタンダールもいくぶん違った角度から政治的パンフレットを出してこの問題に容喙することになる。

「自由」と「個人」の議論

P・I・ルーアンが「個人主義」という言葉を使用したのは、前述のとおり、シャルル・デュノワイエの著作、『自由との関係において考察した産業と道徳』(*L'industrie et la morale considérées dans leur rapport avec la liberté*)以下、『産業と道徳』と略記¹⁵⁾の書評においてであった。デュノワイエは一八〇一四年六月、シャルル・コント(Charles Comte 一七八二―一八三七)とともに『検閲者』(*Le Censeur*)を創刊¹⁶⁾、第一次王政復古の過激王党派に対して自由主義的な立場からこれを批判したが、翌年、ナポレオンが復帰していわゆる百日天下が終わると、一五年九月に発禁処分となった。しかし、一七年には『ヨーロッパの検閲者』(*Censeur européen*)と名前を変えて復刊し、徹底した自由主義の立場から論陣を張った。かれの最初の主要な著作ともいえるべき『産業と道徳』は、一八二五年にA・ソトレによって出版されたものだが、ここでデュノワイエは、セーの主張を批判的に敷衍するかたちで復古王政に対抗し、『産業』という名のもとに「自由」を擁護する。日本語で書かれたデュノワイエに関する数少ない論攷のなかで岩本

吉弘が述べているように、じつは第二次王政復古以来、「自由」は「産業」という言葉とともに議論されることが多かったのである。個人の能力を最大限に発揮することができると環境のなかにこそ幸福があり、その自由な環境を担保するのが経済的な発展であるとする考えは、当時、自由主義的な立場に立つ知識人のあいだで広く共有されていた。経済的発展が個人の物質的生活の自立を促すからである。なかでも「過激自由主義者」ともいわれるデュノワイエは、樂觀的なまでに経済的発展とそれを支える産業を称揚した。その思想に直接影響を受けたとみられるフレデリック・バステリア (Frédéric Bastiat 一八〇一―一八五〇) は、このフランス自由主義の産業主義的主張について以下のように述べている。

「……」デュノワイエは、産業という語に従来以上の広い意味を与えた。というのも、われわれがもつ諸々の能力をより完全なものにすることをめざすあらゆる労働を、かれはこの語のもとで理解しているからである。したがって、有用で正当な労働はすべて産業であり、政府の首長から職人にいたるまで、それに身を委ねる人間はすべて産業者 (industrieux) である。¹⁹⁾

一見すると、サン＝シモンの文章であるといってもおかしくないような印象をあたえるが、ここでバステリアがデュノワイエにみているのは、徹底して自由主義にたつ産業主義であって、産業という名のもとに社会を集産主義的に組織化しようとする考えでもちろんない。あくまでも個人の能力の十全な発揮を促す体制、すなわち自由な産業活動のなかに労働の理想を見出し、その視座から社会の文明的発展を方向づけようとする思想である。実際、『産業と道徳』は、冒頭から「われわれは産業的になり道徳的になることによつてはじめて自由になる。」²⁰⁾と宣言している。デュノ

ワイエは、「産業的」という言葉を政治的に使用するとし、職業的に巧みな技術を得て社会を支配する支配者階級が労働する人びとのなかに溶解する、あるいは逆に労働者階級が決定的な影響力を獲得して、支配者階級よりも優位に立つような状態になつてはじめて「産業」社会と呼ぶことができるという。⁽²¹⁾ そうなれば、支配するのはもはや権力への情熱ではなくて労働への情熱からであり、人びとは既存の富を奪い合うのではなく、新たな富を創造するために各自がもてる力を注入するようになる。そして必然的に労働のみが富を得る手段となり、その結果、政府は産業事業会社 (enterprise industrie) の「こき存在となるが、一般の会社と異なるのは、それが限られた特定の個人あるいは団体のためにあるのではなく、共同体全体の利益のためにあるという点である。⁽²²⁾ ここに、個人の自由を侵さず、その自由を守るのに最小限の国家を想定するミナキズム (最小国家主義) の匂いを嗅ぎとることは容易であらう。バスティアがデユノワイエを評価したのも頷ける。デユノワイエはいう、今までの人間の歴史においては、「権力の行使」とは「富裕になるための非常に強力な手段」であり、それがゆえに権力は「人類の大きな野心の的」となってきた。だが「産業」にもとづく社会では、誰もが生産労働によってのみ富を得るのであり、政治権力のそうした特殊な意味あいは消滅するだろう。「可能な限り多くの個人が労働し、可能な限り少数の個人が統治する」、それが「産業」による進歩の方向である。「人間の目的は統治ではまったくない。……人間の目的、それは産業であり、労働である。」「統治(政府)」とは「生産の従属物」にすぎなくなる。そして「完成の極とは、全員が労働し、誰も統治しないこと」なのである。⁽²³⁾

かくして政治権力からできるだけ遠ざけられた個人の自由にもとづく産業体制を構想するなかで、「自由」と「産業」の議論は分かちがたく結びつけられることになる。大まかな見取り図でいえば、個人の自由を最大限發揮しうる環境を保証しようというのがこれまでみてきたデユノワイエらの過激自由主義の潮流であり、これに対し、過度な自由は

無政府状態につながるとして、むしろこれを統制する組織を重視しようとする産業主義の流派がサンシモン派であり、のちの社会主義につながる潮流をつくっていった。

こうした歴史的文脈において、ジャン＝バティスト・セーの影響力は絶大であった。一八一四年にセーの『経済学概論』の第二版が出版されるや、この書は新しい経済学の教科書とみなされ、多くの読者を得る。ナポレオン体制の崩壊とともに立ちあがった復古王政が旧体制下の抑圧的政策を志向するなか、「産業」による経済的發展を謳うことで、政治的な和解と結合と繁栄を模索する道を拓こうとしたのだ。セーは、生産の構成因子を産業、資本、自然因子にわけ、生産性をあげるためには自然因子の活用がいかに重要であるかを主張する。すなわち、自然因子には、農地のように個人の自由な所有になるものと、風や川のように個人にはなく万人の利用に供されるものがあるが、いずれも本来は富の増加に資するものであって、もし土地の所有者がその果実を独占して摘むことが保証されなければ、また、安心してそこに大きな価値を付与し、とりわけ生産物を増やすことができなければ、とうてい土地という自然因子はじゅうぶんに生産性をあげることはないだろう、という。そのうえで、かれはつぎのように主張する。

「……」産業 (industrie) にすべての自然因子を占有できるよう無限の自由を与えれば、それによって産業はかぎりなく進歩を拡大させることができる。産業の生産力を限界づけているのは自然なのではない。それは、生産者の無知か怠惰、そして国家の悪しき管理なのである。⁽²⁵⁾

ここで用いられている「自由」は *liberte* ではなく *latitude* という語だが、「国家の悪しき管理」 (*la mauvaise administration des États*) といった言葉からみてもあきらかなように、国家の管理からの自律というきわめて政治的

な意味がそこには込められている。

第二次王政復古初期、王党派、立憲派、共和派、ボナパルティストなど、政治的にさまざまな勢力が入り乱れ、国政はじつに不安定なものであった。革命と帝政の動乱を通じて過去との断絶を経験したことによって、ウルトラと呼ばれる極右王統派からジャコバンの共和派まで、あるいは王政復古とともに復活したカトリック勢力から無神論を唱える無政府主義者にいたるまで、思想の方向性は混迷の度を増し、必然的に価値観が多様化した時代である。そのようなかで台頭してくるのがサン＝シモンの思想であった。かれは、いまなお革命は成就しておらず、産業体制（*systeme industriel*）の確立によってはじめて革命は終結と考える⁽²⁶⁾。初期の著作『ジュネーヴ人の手紙』のなかですべての人間は労働しなければならぬことを説き、その産業的平等を保証したうえで、産業者による管理体制によって国家が運営されることを夢見た。フランス革命によって政治的になされた革命は、実質的・経済的内容を付与されることによってはじめて成就される—そう考えていたかれは、「産業」こそが社会を再組織化する原動力であるとして、これを理論的に位置づけようとしたのである。のちに「政治学は生産にかんする科学である」と宣言し、「政治学は、経済学にそっくり解消してしまふ」と予言するにいたるだろう⁽²⁷⁾。経済の状況が政治的諸制度の土台であるというこの認識は、この時代に経済が現実的な意味で実権を握ってしまうことと並行的である。と同時に、この趨勢は、さきにも論じたように、そうした現実主義に支えられているがゆえに、全く逆の精神的傾向を生む。ロマン主義とは、このような不安定な現実主義の平衡錘としても成長したし、のちに空想的社会主義と呼ばれることになる思想が、現実の改革にとどまらずにユートピアにまで駆け上がってしまうのも、また同断である。

ルーアンのデヌノワイエ批判

さて、さきに見たデヌノワイエの説く過激な自由主義は、経済的發展を基礎として、失われた精神的一体性を取り戻す夢を描いていたサン＝シモン主義者からすれば、むしろ社会を解体してしまふ危険な思想にみえたであろう。ルーアンはいう、「自由について著者のいうところを文字どおり受け取り、その思想をとことん突き詰めてみるとすれば、われわれはかれと対立することになる。かれはあきらかに過大なものを自由に付与している、というのも、かれはそれを社会の目的としているからだ。そして暗黙のうちに社会に過小なものを付与している。というのも社会を道徳や産業に従属させているからである。「……」自由が変質して無政府主義の恒久的原因になるのは、自由をその本来の役割からそらし、何かを打ち立てるための道具にしようとするときにほかならない⁽²⁸⁾」。さらに「自由の觀念がなすべきことをほとんどたず、ばらばらにするよりも連帯させることがずっと急務であり、実証的理論が批判的理論のあとを継がなければならぬ時代」があるのだという。「われわれはそのような時代に入っているのであり、一八世紀の学理は日々その重要性を失っている。それらの学理が、批判哲学の有用な仕事の連続を完成させたかにみえる『検閲者』の流派によっていわば薄められて以降、とくにそうなのである」⁽²⁹⁾。

ここでルーアンは、デヌノワイエらの自由主義を過去のものともなし、サン＝シモンの衣鉢を継ぐ論客として社会を統合する精神的紐帯の構築を求める立場からこれを断罪している。サン＝シモンはこの約五年前に出版された著作『産業体制論』(Du Systeme industriel, 1821)において、「いかなる場合においても個人的自由 (libertes individuelles) は社会契約の目的にはなりえない。真の観点から自由というものを考えると、それ自体漸進的な文明化の結果ではあってもその目的ではありえないだろう。ひとは自由になるために連合するのではないのである。」と

述べ、「真の自由とは、場合に有益な物質的あるいは精神的能力を支障なく、また能うかぎり広く發展させること」にあると結論づけていた。⁽³⁰⁾ 個人的自由はデュノワイエらのラディカルな自由主義にとつてはもつとも重要な大義であつたのに対し、サンシモンにとつて自由の自律性は、分業が創出する役割にもとづく社会的連帯を阻む要因となるのである。

以上のように、サンシモンの自由に対する考えをルーアンはそのまま踏襲しながらデュノワイエを批判したとみてよいのだが、重要なのは、まさにこの時期、すなわち『生産者』が創刊された一八二五年から翌年の二六年の早い時期にかけて、産業主義陣営のなかに自由の捉え方をめぐって思想的分断が生じているということである。じつは、デュノワイエの著作の書評を二六年一月の『ルヴュ・アンシクロペディック』*Revue encyclopédique* に寄せたバンジャマン・コンスタンは、その末尾に「ホストスクリアフトゥム 追補」をつけてルーアンの論述に触れ、この党派がデュノワイエの思想を「個人主義」と呼んでいることに言及したうえで、以下のように述べている。

人類の完成にとつてわれわれが唯一正当かつ好ましいと思つてこの（デュノワイエの）体系は、産業的教皇主義（*papisme industriel*）を打ち立てようとしてゐる新たな党派にとつては嫌悪すべきものである。どんな意見の分裂にも、どんな努力の対立にも、この一派は無秩序（*anarchie*）を見る。あらゆる人間が同じようにものを考えないことを、いやもつと適切な言い方をすれば、多くの人間が失礼にも自分の上司が望むのとは別様にものを考えることを恐れているのだ。このような恥すべきことを終わらせようと、この党派はある靈力を援用する
[……]。⁽³¹⁾

コンスタンはルーアンによってはじめて使用されたとされる「個人主義」という言葉をここでいち早くとらえ、この個人の自由の存立を脅かしかねない集団を警戒しつつ、デヌノワイエの自由主義を擁護しようとしている。コンスタンの自由主義も個人主義に近いものであり、その精神は、経済の分野においては交換が発達していくなかで個人の力を意識し、政治の分野においては個の自由を保証する立憲的实践を意識するとともに、自由が無秩序とみなされる社会にあつて、その不安定さを同時に認識するものである⁽³³⁾。

いずれにしても、一八二六年初頭、個人の自由と産業主義をめぐる議論は、自由主義イデオロギーのあいだにいくつかの思想的亀裂を生じさせていたことは事実であろう。

スタンダールとデヌノワイエ

スタンダールもまたデヌノワイエのこの著作を読み、この過激な自由主義的主張に賛同しているようにみえる。サンシモン主義と論を戦わせることになる政治的パンフレット『産業者に対する新たな陰謀について』を刊行する少し前、当時寄稿していた『ロンドン・マガジン』(London Magazine)において、デヌノワイエの著作を *La Morale et l'Industrie considérées dans leurs rapports avec la liberté* と誤って表記(「道徳」と「産業」の順序が逆)しつつ、デヌノワイエがシャルル・コントとともに『ヨーロッパの検閲者』を出していたこと、エルバ島から帰還したナポレオンにもっとも恐れられたメデアがこの二人の定期刊行物であったこと、そのため執筆者の多くを買収して地方の管理職につけたが、この二人には拒否されたこと、それゆえフーシェはかれらを危険視したこと、などを紹介している⁽³⁵⁾。スタンダールはこの論客のなかに、時の権力に対して距離をとり、どこからも「買収」されることなく自立して自由を擁護する闘士の姿をみたのであつた。

デュノワイエ氏の本は、称賛されるにはあまりに真実すぎる。氏はわが国の著名な銀行家ラフィットの愛国主義の化けの皮をはがしさえした。氏の本は、ここ三〇年間におけるわれわれの社会の状態を忠実に描いた絵巻である。この点で、この著作はミニエの『革命史』のとてもよい補遺となつて⁽³⁶⁾いる。

スタンダールが何よりも自由を愛する人間であり、自由主義者である点においては、理論上、産業者と同じである。王政であれ、帝政であれ、それが人びとの自由を挫くものであるかぎりにおいて、それに反撃する。産業者たちもまた、この自由が第一に重要なものとして考えたし、実際、かれらはみな自身を自由主義者と思つていた。

ところが、おそらく一八二五年を境にしてスタンダールの目に、個人の自由との關係に照らして産業主義のなかにいくつかの分派が見えてきたのであろう。本来、自由主義を奉じる産業者たちは理論上、最大限の経済活動を行うために国家の権力から自由にならうとする。産業者が自由主義的であるというのはそういう意味である。しかし、理論と現実がちがうのであつて、事はそう単純ではない。一八二〇年代の産業界および経済界を實質的に支配していたのは銀行家であり、産業者のなかの中枢であつたことは繰り返すまでもないだろう。では、かれらはみずからの経済活動を積極的に推進する自由のために国家を遠ざけたかといえば、けつしてそうではない。理想的には「自由」を標榜しながら（したがつてリベラルである）、実際には復古王朝の国家（すなわちヴェイレル内閣）とつよく結びつきはじめていたのである。

なかでもっともスタンダールの気に障つたのは、ハイチ借款と亡命貴族への賠償金問題の背後で銀行家が暗躍していたことであつた。その中心にいたのがラフィットである。まずハイチ借款についていえば、フランスが承認したハイチ共和国の独立は、それと引き換えに元植民者に一億五千万フランの賠償金を支払うことが条件であり、その資

金はフランス銀行が貸すことになっていた。この問題がその後長く借金と利子でハイチを苦しめることは周知のおりだが、ここに銀行家（ラフィットその他）と国家（ヴィレル）の共謀があったことは誰の目にもあきらかであった。もともと反王党派勢力として集っていた自由主義陣営の理念からすれば、こうした銀行家と政府との癒着は大きな逸脱である。スタンダールが憤慨するのも無理はない。

亡命貴族への賠償金問題、すなわち一〇億フラン法についても同様で、一八二五年四月、即位したばかりのシャルル一〇世が成立させたこの賠償金の元手を捻出する方法として出されたのが、年金利率五%から三%への改定であった。⁽³⁷⁾当然のことながら、これはヴィレルと銀行家のあいだの交渉の結果である。スタンダールはいう、「ド・ヴィレル氏は国民のどの階級を頼みにしようとしているか。工場主、商人、銀行家の階級であり、ドレセル、テルノーといった人たちである。ド・ヴィレル氏の好意のおかげで将来の公債において何百万も儲けさせてもらうことになるこの銀行家たちは、まもなく致命的な三%「……」をあげさせようとするようだ⁽³⁸⁾」。要するにラフィットら銀行家は自由主義の陣営を裏切ったことになる。産業の独立を謳ってきたはずの反王党派の自由主義産業家たちも、政府（国家）との関係を密にしてきたのである。さきに引用したスタンダールがデュノワイエを称賛する言葉のなかに「氏はわが国の著名な銀行家ラフィットの愛国主義の化けの皮をはがしさえした」とあったように、このような自由主義的銀行家と政府との親密な関係を暴いたからこそ、デュノワイエの評価はあがったのである。

他方、サン＝シモン派については、すでにみたように、もともとは自由主義の陣営から出発しているにせよ、産業による社会の再組織化という前提から個人の自由を抑制的にとらえる方向性が一段と前面に押し出され、しだいに国家主義的な色彩を帯びてくる。

いずれにしても、個人の自由と独立を第一義的な価値とみなす自由主義者スタンダールは、サン＝シモン主義が描

く産業主義的社會体制も容認することができなかつたし、自由主義の理念を吹聴しつつ私欲のために政府との結びつきを深める銀行家については、ほとんど「裏切り」のように見えたにちがいない。⁽⁴⁰⁾「自由主義」と「個人主義」は本来、「個人」の「自由」を保証するという前提のもとに親和性をもち、それがゆえにこの両者は互いに時をおかずして思想的枠組みとしてあらわれてきたのであつた。そして、それを戦鬪的に擁護したのがシャルル・デュノワイエやシャルル・コントであり、少なくとも一八二五年段階ではスタンダールもその系列に位置していたとみなしてよい。

とはいえ、「個人主義」という言葉が当初、社会の有機的組織化を強調するサンシモン主義の側から批判的な意味を込めて用いられたものであることを考えれば、この時点ですでに、「自由」と「個人」のあいだに亀裂が入つていたと考えるべきであろう。産業者たちのあいだで、「自由」はなお輝きを失わない価値として求められ続けたが、その自由を享受すべき「個人」は、国家や社会という価値の後塵を拝する地位にとり残されつづけるのである。⁽⁴¹⁾

もとよりスタンダールにおける自由の価値は、もっぱら個人の自由という形式において測られるものである。社会の総体よりも屹立する個人を描こうとしたスタンダールにとって、このような状況はおそらく容認しがたいものであつた。どの党派からも援護してもらえず、政治的パンフレットとしてはほとんど失敗作というべき『産業者に対する新たな陰謀について』が書かれなければならなかつたのも、このような承服できない自由主義の実情が目の前にあつたからである。

一般にロマン主義は「個の解放」といわれ、その「解放」と「自由」はほとんど同義語として考えられている。しかし、同時代の産業主義が語りはじめた自由主義は、むしろ個を消去するイデオロギーの趨勢を生みだしていくのである。

エゴティスムと個人主義

以上のような状況のなか、スタンダールにとって「個人」の問題はきわめて切実なものとしてふたたび浮上してきたにちがいない。『エゴティスムの回想』を書く段になって、一八二五年当時あれほどもちあげられていたデュノワイエの評価は急落している。「デュノワイエは」自由主義の勇者であったのに、今日、ムーランの折り目正しい知事になっている。このうえなく好意的で、たぶんもっとも英雄的なのだろうが、自由主義の著述家のなかでもっとも馬鹿である⁽⁴²⁾。この評価の激しい変化がどこから生じたかといえば、それは七月王政の時代になってデュノワイエが官職を得たことによる。王政復古期に政府から「買収」される実業家をあれほど軽蔑し、激しく糾弾することでスタンダールの称賛を勝ち得た過激自由主義者が、時代が変わると政府の末端の地位にすんで身を差し出したのだ。『エゴティスムの回想』のなかでのデュノワイエは一貫して「愚鈍」(lourdeur)、「鈍重」(lenteur)、「退屈」(ennui)といった言葉で形容され、「尊敬に値する」「過激自由主義者」(ultralibéraux)は過去形とともにしかあらわれない⁽⁴³⁾。

サン＝シモン主義と戦い、産業主義を戴く銀行家たちへの攻撃をしかけていたときのスタンダールには、おそらく自由な個人を体現する人物としてデュノワイエの姿があった。個人主義がデュノワイエにおいて具体化されていたといってもよい。ところが、七月革命をはさんでその姿は大きく変わったのである。スタンダールの「エゴティスム」は、周囲の個人主義的理想がこのように崩れていくにしがって、逆説的に光を放ちはじめたのではないだろうか。

「個」が抑圧されるような自由主義イデオロギーの蔓延するなか、それらを指示対象として使われた individualisme とは別の言葉でみずからの「個人主義」を主張しなければならぬとすれば、その言葉は何であるべきだろうか。この作家にとってそれは「エゴティスム」という言葉以外にありえなかった。シャトーブリアン風に臆面もなくみずか

らを語るしぐさを「エゴティスム」として非難しつつ、それを逆説的に自身の個人主義を主張する「武器」として用いる戦略、すなわち、自己卑下的に自身を「エゴティスト」として位置づけ、どの集団や社会にも埋没しない個の存在を、なかば自己韜晦的に引き受けるというのが「エゴティスム」のスタンダールの意味なのである。

ところで興味深いことに、「エゴティスム」という英語から借用された語も、この時代に使われはじめたいわば新語である。厳密にいえば一七二六年まで遡ることができものの、辞書に記載されるようになるのは、まさに individualisme の語が誕生したのとほぼ同じころだ。⁴⁴スタンダール自身はすでに一八二三年、『ラシーヌとシエイクスピア』に収められている「笑いについて」のなかでこの語を使用している。フランスではもっとも早い時期にこれを使用しはじめたのがスタンダールだったという点を軽視してはならない。「自由主義」とならんで「個人主義」が「主義」として語られるにじゅうぶんな思想的基盤をもちはじめたこの時期に、「エゴティスム」もまたスタンダールの意識にのぼってきたということだ。もちろん、individualisme に代わるスタンダール独自の個人主義を受け取る器として機能するのはもう少し後であるが、これまで議論してきたような自由主義と産業主義の交錯する議論のなかで、かれは「エゴティスム」に新たな価値と意味を見だし、これを表現上の武器に仕立て上げていくのである。

王政復古期における「個」と「自由」の問題は、この時代からはじまるロマン主義の文脈では「自由な個の解放」という流れのなかで論じられるけれども、もっと広汎な同時代の社会的現実における自由主義の議論においてはそれほど単純なものではない。王党派からすれば、ボナルドのいうように「自由は無秩序と専制につながるため、社会の安寧は、個人の自由に抗して守られなければならない」ということになる。また、サン＝シモン主義の立場からいえば、「個人主義が社会関係において支配的になるところでは、あちこちで人間はすぐに野蛮状態に陥ってしまう」と

され、⁽⁴⁶⁾しだいにこの自由が後回しにされていくことはすでにみたとおりである。このように、現実の思想的文脈のなかでスタンダールをみるとき、「エゴティスム」という語をかれが用いたのはいわば必然なのであり、その意味はいまいちど深く考えられなければならない。

註

- (1) メーヌ・ド・ピランの『日記』(*Journal intime*)の一八二八年二月二日の記述にあらわれる言葉で、リシュリュー内閣の解散とともに海軍大臣を辞したモレ伯爵とのやりとりのなかに記されている。*Journal intime de Maine de Biran (1817-1824)*, t. II, publié par A. de La Valette-Monbrun, Pion, 1931, p. 143.
- (2) 工藤庸子『評伝スタール夫人と近代ヨーロッパ フランス革命とナポレオン独裁を生きぬいた自由主義の母』と東京大学出版会、二〇一六年、二七七頁。バルザックの『老嬢』では、コルモン嬢を真剣に愛していたアタナーズが、彼女とデユ・プスキエの結婚を知り、ショックを受けつつも平静を装う場面での opinions *libérales* という表現がでている。^{*}「L'apparente insouciance d'Athanasse expliquant son refus de faire à ce mariage le sacrifice de ses opinions *libérales*, mot qui venait d'être créé pour l'empereur Alexandre, et qui procédait, je crois, de Mme de Staël par Benjamin Constant.」(*La Vieille Fille*, in *La Comédie humaine*, IV, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1976, p. 911.) コンゴウ皇帝アレクサンドルとはどうもなまなましくナポレオンと戦い、ポーランドに憲法を与えてポーランド立憲王国を復興したロシア皇帝アレクサンドル一世のことである。工藤によれば、*Décal* という語はすでに一八世紀半ばから「個人の自由、とりわけ政治的自由に好意的な立場」という意味合いで使用されていたが、「⁽⁴⁷⁾」では opinions *libérales* という組み合わせが表現として新鮮だったのだろう」という。この作品の物語設定は一八二六年。工藤庸子、同書、注(第五章)、六一頁参照。
- (3) かれらはいずれも一七六六年から六七年の生まれ。ちなみに、一九世紀前半の銀行家にして七月王政の首相も務めたジャック・ラフィット、フランス古典派経済学の中心人物であるジャン・バティスト・セーも六七年生まれである。同時代の文豪シャトーブリアンは六八年、かの大ナポレオンはさらに一歳下の二七六九年の生まれ。
- (4) P. Imbs *et al.*, *Tresor de la langue française informatisé*, entrées: «Industrialisme», «socialisme», «⁽⁴⁸⁾ industrialisme」の語は

サンシモンが『産業者の教理問答』のなかで使用したのが最初であり、socialisme については、一八三二年にビエール・ル
ーが社会を個人に還元して理論化する「個人主義」に対立する概念としてこれを用いた。

- (5) 拙著『スタンタールのオイコノミア―経済の思想、ロマン主義、作家であること―』（関西大学出版部、二〇一七年）では、ス
タンタールを「究極の個人主義者」と位置づけ、さまざまな角度から自由主義経済や産業主義に対するこの作家の距離のとりか
たについて論じた。

- (6) *Tresor de la langue française informatisé*, entrée: «Individualisme》。華扱じつぎ資料は『Doctrines de Saint-Simon, Exposition,
Première année, 1829. Nouvelle édition publiée avec introduction et notes par Césaire Bouglé et Elie Halévy, Paris, Rivière,
1924, p. 378 et note 248.

- (7) Marie-France Pignet, « *Individualisme* : origine et réception initiale du mot », *Œuvres et critiques. Revue internationale d'étude
de la réception critique des œuvres littéraires de langue française*, Tübingen, Narr Francke Attempto Verlag, XXXIII, 1, 2008, p.
39-40.

- (8) *Ibid.*, pp. 42-43.
(9) Joseph de Maistre, « Extrait d'une conversation entre J. de Maistre et de Ch. de Lavau », in *Œuvres complètes*, t. XIV, Vitte et
Perrussel, Lyon, 1886, p. 286.

- (10) Jean-Yves Pranchère, *L'autorité contre les lumières. La philosophie de Joseph de Maistre*, Droz, 2004, p. 181.

- (11) の介入を擁護した当時の外務相シャトーブリヤンは「ヴェネローナ会議に同時代の秘密結社にこういかなりの頁を割らば。
(12) Pierre-Arnaud Lambert, *La Charbonnerie française 1821-1823. Du Secret en politique*, Presses universitaires de Lyon, 1995,
pp. 115-116.

- (13) François de Corcelle, *Documents pour servir à l'histoire des conspirations, des partis et des sectes*, Paris, Paulin, 1831, pp. 19-20.

- (14) « De l'individualisme, considéré par rapport à la religion et à la morale », in *Le Memorial catholique*, t. IV, Lachevardière fils,
1825, p. 48-49, cité par Marie-France Pignet, « Débats politiques sur la liberté individuelle et raisons langagières dans
l'émergence du mot *individualisme* », in Jean-Pierre Potier, Jean-Louis Fournel et Jacques Guilhaumou, *Libertés et libéralismes,
Formation et circulation des concepts*, ENS Éditions, 2012, p. 169.

- (15) Charles Dunoyer, *L'industrie et la morale considérées dans leur rapport avec la liberté*, Paris, A. Sautetet, 1825.
- (16) いっくんは廃刊に追い込まれたが、一八一七年に『ヨーロッパの検閲者』として復刊される。
- (17) じっはこのちスタンダールが『産業者に対する新たな陰謀について』を出版するのも同じ出版社である。
- (18) 岩本吉弘「シャルル・デュノワイエと『二つの産業主義』—王政復古期フランスにおける産業主義と自由主義(前)」、『二橋論叢』第一一七巻第二号、一九九七年、二五八—二七六頁。
- (19) Frédéric Bastiat, *Lettre à Félix Coudroy*, 9 avril 1827, *Œuvres complètes*, t. I, Paris, Guillaumin, p. 18 なおこの時代、「産業者」を指す言葉として *industrieux* と *industriel* の両方が併用されていた。このうち、しだいに *industrieux* は使われなくなっていく。シャルル・デュノワイエ、シャルル・コントの産業主義と自由主義の位置づけ、およびヌスティアらへの影響については、Robert Leroux, *Aux fondements de l'industrialisme. Conte, Dunoyer et la pensée libérale en France*, Paris, Hermann, 2015[※] 詳細に論じている。
- (20) Charles Dunoyer, *op. cit.*, p. 1. 同じ言葉は本の表題頁にもエピソードとして掲げられている。
- (21) *Ibid.*, p. 323.
- (22) *Ibid.*, pp. 323–324.
- (23) Charles Dunoyer, *Œuvres de Charles Dunoyer, revues sur les manuscrits de l'auteur, Notices d'économie sociale*, Paris, 1870, t. III, pp.39–43.
- (24) 初版は一八〇三年だが、ナポレオンによって書き直しを命じられ、それに従わなかったために発禁処分を受けていた。
- (25) Jean-Baptiste Say, *Traité d'économie politique ou Simple exposition de la manière dont se forment, se distribuent et se consomment les richesses*, septième éditions, Paris, Guillaume et Cie 1861, p. 72.
- (26) Saint-Simon, *Du système industriel*, in *Œuvres*, Starkine Reprints, p.28.
- (27) *Ibid.*, p.59.
- (28) * Examen d'un nouvel ouvrage de M. Dunoyer, ancien rédacteur du *Censeur européen* (Premier article) *, in *Producteur, journal de l'industrie, des sciences et des beaux-arts*, t. II, Paris, Sautetet et Cie, 1826, p. 168.
- (29) *Ibid.*, p. 168.

- (30) Saint-Simon, *Du Système industriel*, Paris, Antoine-Augustin Renouard, 1821. « Préface », p. xiii ; *Œuvres complètes*, édition critique présentée, établie et annotée par Juliette Grange, Pierre Musso, Philippe Régnier et Frank Yonnet, PUF, 2012, vol. III, p. 2348.
- (31) *Revue encyclopédique, ou analyse raisonnée des productions les plus remarquables dans les sciences, les arts industriels, la littérature et les beaux arts*, t. XXIX, janvier 1826, p. 432.
- (32) *Ibid.*, p. 432.
- (33) Lucien Jaume, *L'individu effacé ou le paradoxe du libéralisme français*, Fayard, 1997, p. 90.
- (34) 『シエル・クルーゼもみずからの校訂版におごつたのスタンダールの誤りをよめ』「踏襲」』 *La Morale et l'Industrie*……
 語の順序を逆転させ、表記しつゝ。 Michel Crouzet, « Préface », in *Un nouveau combat contre les industriels*, suivi de *Stendhal et la querelle de l'industrie*, édition établie, annotée et présentée par Michel Crouzet, La Chasse au Shark, 2001, p. 14.
- (35) Stendhal, « Lettres de Paris, par le petit-neveu de Grimm (II) » (11 novembre 1825), in *Paris-Londres. Chroniques*, édition, présentation et introduction de Renée Denier, Stock, 1997, pp. 576-577.
- (36) *Ibid.*, p. 577.
- (37) 公債の年利を5%から3%に引き下げることによって、年間二八〇〇万フラン節約し、これを賠償金の元手にするといふものである。ヴィレールは前年にこの切り下げを画策していたが、それが賠償法の資金の捻出のために新たに提案されたのである。
- (38) *Mélanges I*, in *Œuvres complètes de Stendhal*, Cercle du Bibliophile, 1967-1974, t. 45, p. 268.
- (39) ほごんごの新聞は、有力な銀行家の出資によつて成り立っていた。ラフィットを例にとれば、『商業新聞』(*Journal du commerce*) はかれの新聞といつても差し支えなく、『グローブ』(*Le Globe*) から『生産者』(*Le Producteur*) に至るまで多くの機関紙に出資していた。
- (40) Michel Crouzet, *op. cit.*, p. 25.
- (41) この点を包括的に論じたのがすでに引いたリュシアン・ショームの著書、『消された個 あるいはフランス自由主義の背理』(*L'individu effacé ou le paradoxe du libéralisme français*, Fayard, 1997) である。
- (42) *Souvenirs d'égotisme*, in *Œuvres intimes II*, édition établie par V. Del Litto, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1982.

p. 456.

- (43) *Ibid.*, p. 457.
- (44) ヘル・リットは一八二四年の辞書『F. Raymond, *Dictionnaire des termes appropriés aux arts et aux sciences et des mots nouveaux que l'usage a consacrés, pouvant servir de supplément au Dictionnaire de l'Académie*, 1824』(「自己を語るべき欠点、自己を語る非難すべき習慣」を挙げている。Cf. V. Del Litto, « Préface », in *Œuvres intimes I*, édition établie par V. Del Litto, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1981, p. XIX.
- (45) Antoine Compagnon, *Antimodernes. De Joseph de Maistre à Roland Barthes*, Gallimard, 2005, p. 72-74 (トントロース・ロンパニョン『アンチモダン 反近代の精神史』(松澤和宏監訳) 名古屋大学出版会、二〇一二年、五六頁)。
- (46) Frédéric Le Play, *La Réforme sociale*, in *Textes choisis*, éd. Louis Baudin, Dolloz, 1947, p. 147.